

恭仁宮の四至

今造る^{くに}久迹の都は山川のさやけき見ればうべ知らすらし（『万葉集』巻六 1037）

天平 15（743）年 8 月、大伴家持が恭仁（久迹）宮を詠んだ歌が万葉集に収められています。この時、家持の目の前に広がっていた恭仁宮とは、どんな姿だったのでしょうか。

恭仁宮は、聖武天皇によって造られた奈良時代の都です。当時、都では天然痘が流行し、天平 9（737）年には藤原房前^{ふじざき}を含む有力貴族が死亡、天平 12（740）年に藤原広嗣^{ひろつぐ}の乱が起きました。この時、聖武天皇は伊勢への行幸を進めており、伊勢の国から平城宮へ帰ることなく恭仁宮にそのまま入りました。突然の遷都でした。明けて天平 13（741）年には恭仁宮で元旦の朝賀の儀式がおこなわれましたが、大極殿ができておらず、宮の大垣の代わりに幕で周囲を囲むというありさまでした。



宮城の門跡（恭仁宮跡：京都府教育委員会提供）城国国分寺の金堂となり、その南東

には七重の塔が築かれたよう
です。

あしかけ3年3か月とい
う短命の都でしたが、宮が
どのように造られていたの
かを解明するために、毎年
のように発掘調査が行われ
ています。その調査の結果、
次第に恭仁宮の実態がわか
るようになりました。



恭仁宮内裏東地区の大型建物（京都府教育委員会提供）

恭仁宮の範囲（四至）は、東西約 560 m、南北約 750 m の範囲で、その四周は^{おおみやがき}大宮垣と呼ばれる大規模な築地堀で囲まれていました。また、大宮垣の東西南北の各辺には宮城門が存在したと考えられており、発掘調査でも宮の東面の南門と考えられる^{はつきやくもん}八脚門の遺構が確認されています。宮内部の施設としては、天皇の即位や元旦等の重要な儀礼が執り行われた宮内中枢の建物である^{だいくでん}大極殿が調査されています。恭仁宮では、平城宮の第一次大極殿が移築されたことが分かっています。大極殿の北側には天皇の住まいで、東西に2つの区画が並んでいる内裏があり、その中心部からそれぞれ大きな建物が確認されています。大極殿の南側には役人たちが政務を執る^{ちやうどういん}朝堂院がありますが、朝堂院の建物配置などは未だ明らかではありません。また、都の中心部分である宮の周囲には大路・小路で区画された京城が想定されます。しかし、恭仁宮は狭い平地にありましたので、十分な大きさの都ができません。歴史地理学では、右京城（旧木津町）と左京城（旧加茂町）が分かれている復元案がありますが、考古学の成果では未だ京城に関連した遺構は見つかっていません。かつては幻の都と言われた恭仁宮ですが、発掘調査の進展で徐々にその姿が具体的に復元できるようになってきました。（森 正）